【研究ノート】

Näversöm（ナーベルソム）～スウェーデンの伝統刺しゅう～

Näversöm Swedish Traditional White Embroidery

永田　貴恵子
NAGATA, Kieko

Ⅰ　はじめに

手芸（Hand craft）とは布・糸・針やいろいろな素材や用具を使い手先の技術によって作られるものの総称である。この中でも大きな要素を占める刺しゅうとは布地を美しく加工する方法の一つである。布地に糸を使って刺しながら模様を作り出していく装飾用縫い取りのことである。

世界各地にはその土地の生活に合った特有の色や模様が古い時代から作り出されてきた。刺しゅうが歴史の流れと共に発展してきたしたことは、美術館において、また現在もなお伝統として継承されている各地の民族刺しゅうを通して、また多くの文献を通して知ることができる。

図１　スウェーデンの地図

本研究では、世界各国の様々な刺しゅうの中から、日本においてほとんど知られていない『ナーベルソム刺しゅう』に注目し、紹介していきたいと思っている。ナーベルソムを学ぶにはテキストが必要となるが、刺し方や図案が書かれた本は、1970年頃にスウェーデンにおいて何冊か出版された以降、新しい本は出版されておらず、古本を探すしかないのが現状である。近年では残念なことにスウェーデンにおいても、ナーベルソムはあまり身近な刺しゅうではなくなっているようである。日本では、2015年にヤマナシヘムスロイドから日本語訳の本が１冊出版されているのみである。従って、様々な図案や詳しい内容を知るには、スウェーデンの本を当たることが重要であるが、容易なことではない。そこで今回、実際に作品の制作をしながら、その制作過程を示し、その技法を実際に試すことができるようにした。また、基本となる５つのステッチを一つの作品に取り入れ解説したものは他に無く、特筆すべきことであると思っている。

ナーベルソムを多くの人に知ってもらいナーベルソムを学ぶための一助になればと願っている。

Ⅱ　ナーベルソム刺しゅうとは

ナーベルソムとはスウェーデンの伝統的な白糸刺しゅうである。この技法は17世紀ころに生まれたといわれている。ノールランド（スウェーデンの北部の９つの地方）に起源を持ち、特にヘルシングランド地方（図１）で大きな広がりを見ることができる。

Näver＝白樺の樹皮　söm＝ステッチ　と翻訳される。それは白樺の樹皮を刺しゅう枠として使用してステッチをしたからである。羊飼いは動物の世話をしながら刺しゅうをしていたので移動の時はこの白樺の樹皮をくるくると巻き上げることによって刺しゅう部分を保護し、さらに簡単に持ち運ぶことが出来るのである。（図２）

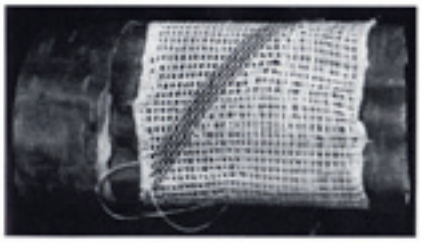

図２　18世紀初頭の白樺に巻いたナーベルソム
北欧博物館蔵

古いナーベルソムのパターンの研究を行っていたタイラー・フィッシャー（図３）は、自身のパターンに関する本を何冊も出版している。1913年には多くの講座を開催し、ナーベルソムのステッチ研究の第一人者と考えられている。

彼女の研究のおかげでナーベルソムの技術はスウェーデンだけでなく近隣諸国にも広まった。

古くは、ナーベルソム刺しゅうは寝具を飾るためや教会の衣装にも使われていた。その後はテーブルクロス・ランプシェード・窓の飾り・メガネケース・枕・バッグなども作られている。

図３　タイラー・フィッシャー氏

図４　ヘルシングランド地方の枕カバーの刺しゅうの一部

Ⅲ　デザインと材料

①　デザイン

ナーベルソムのデザインは主として幾何学な模様で構成される。その他植物を図案化したものなども見られる。

この刺しゅうの技法の特徴は裏面を見ながら作業を進めていくことである。完成するまで表面を見ることは出来ない。

②　ステッチ

基本となるステッチは、Stoppsöm（ストップソム）・Gåsögon（ゴースアーゴン）・Bottensöm（ボッテンソム）・Bergsjöstygn（ビョルクスティン）・Hasselastygn（ハッセラスティン）この５つである。このような記号図で表される。

この５つのステッチを組み合わせて様々な模様を作り出していく。

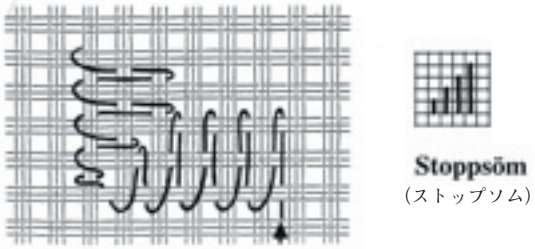

図５　ナーベルソムの記号図①

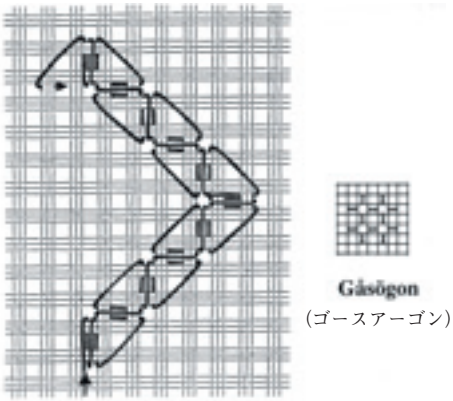

図５　ナーベルソムの記号図②

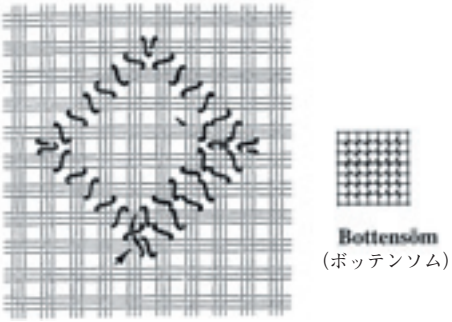

図５　ナーベルソムの記号図③

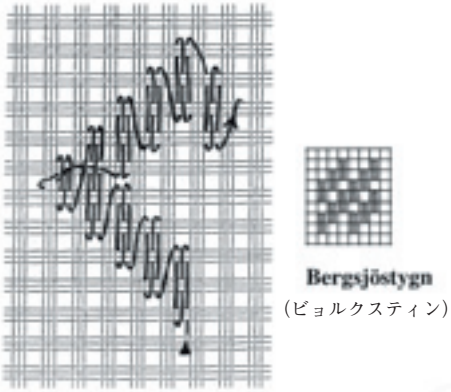

図５　ナーベルソムの記号図④

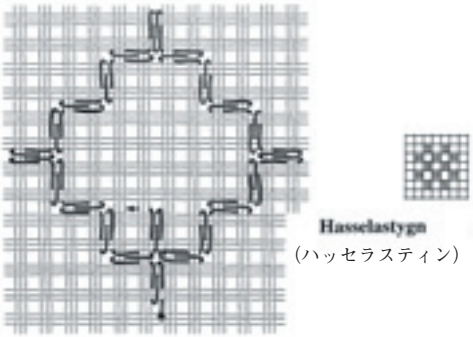

図５　ナーベルソムの記号図⑤

③　布

刺しゅう布は麻の布を用いる。一番多く使用されている布地は delsbolinn（デルスボリン）織り糸１㎝あ

たり14本のものである。その他１㎝あたり10本などの布も使われる。

④　糸

刺しゅう糸は麻糸を用いる。古くは自然な色の亜麻か生成りだったようだが1970年代にはスウェーデン北部ではピンク・赤・青の色糸も使われていたようである。

現在ではスウェーデン製の Bockens の麻糸を使用する。表記の見方は、例として35/３の場合、35が糸の番手を表していてその数字が大きくなるほど糸は細くなる。３は糸のより合わせてある本数を示している。同じ番手で２本合わせと３本合わせがある。色は４/４b が白・１/２b がオフホワイトの意味である。Bockens の麻糸は刺しゅうの他にもボビンレース等にも使用されるので色は白かオフホワイトが多く見られるが色糸も少し作られている。

図６　Bockens の麻糸

ナーベルソムには16番手の太い糸や60番手の細い糸を１本取りまたは２本取りと組み合わせて用いる。糸の太さを変えることによって図案に濃淡が出来て模様が浮かび上がって見える効果がある。

⑤　刺しゅう枠

古くは白樺の樹皮を刺しゅう枠として用いていたが、現在では白樺の樹皮を入手することは困難なのでホームセンター等で購入できる厚さ１㎝ほどの木の板（合板）を用いる。板の大きさは刺しゅう布の四辺が板の側面に被るくらいの大きさのものが良い。そのために作品のサイズに応じた板を何種類か用意しておく必要がある。その板に作品の保護と刺しゅうをしやすくする目的でブロード等の布でくるんだものを作る。白い麻布の刺しゅうが見やすいような色の布でくるむのが良い。これを刺しゅう枠とし、刺しゅう布を板に画びょうでとめる。画びょうは刺しゅう糸が引っ掛からないように頭が平のものを用意する。

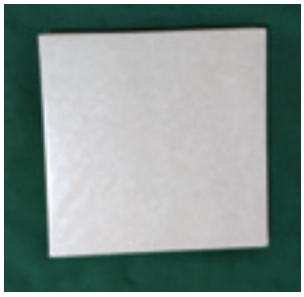

図７　板

図８　布でくるむ

⑥　針

針は布を割らないようにするため先の丸いもの（クロスステッチ針・とじ針等）を使用する。特に織り糸がすくいやすいので先の曲がっているスウェーデン針が良い。（スウェーデン針とは1956年に久家道子氏が考案したスウェーデン刺しゅうに用いる針である。名称はスウェーデン刺しゅうであるがスウェーデン王国の刺しゅうとは別物である。）

図９　スウェーデン針

⑦　刺し始め方

どこから刺し始めるかについて記述されているものは無い。しかし、今までナーベルソム刺しゅうを制作した経験から最初に外周の枠になる模様を刺し、次にデザインの大きい枠組の部分を刺してから、その内側や外側を刺して行くとマス目を数え間違えることなく作業が進められる。輪郭部分は太い糸を用いてはっきりと際立出せ、内側や外側は細い糸を用いて刺すと濃淡が出来て美しい作品になる。

Ⅳ　制作

今回はナーベルソムの基本となる５つのステッチ（ストップソム・ゴースアーゴン・ボッテンソム・ビョルクスティン・ハッセラスティン）を全て取り入れたオリジナルの図案を考案した。この図案はナーベルソムを全く刺したことのない人にも基本のステッチを理解しやすいようになっている。そして図を見ながら一緒に制作を進めて行くことが出来るので取り組みやすく技法が身に付くように考えたものである。このオリジナルの図案（最終ページ図10）を用いてドイリーを制作しステッチの刺し方や注意すべき点を考察しながらの制作過程を示して行きたい。

①　道具と材料

厚さ１㎝　縦15×横15㎝の木の板をブロード生地でくるんだもの

スウェーデン刺しゅう針

Bockens の麻糸 16/２・35/３　リトアニア製の麻糸(黄色)

１㎝あたり14目の麻布　縦20×横20㎝

画びょう

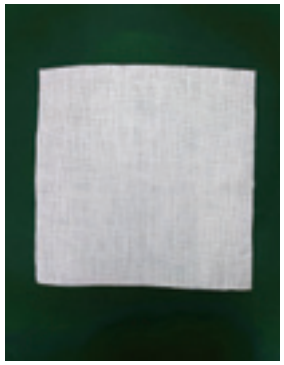

図11　麻布

図12　道具と材料
上から
16/２、35/３、90/２
リトニア製の麻糸
スウェーデン針
画びょう

②　刺しゅうの準備

図10のオリジナルの図案を用いて作品を制作する。縦37マス×横37マスにする。布を四つ折りにして中心を決めて縦・横ともに織り糸を２本抜く。そこを色ミシン糸で中心の目安となるように糸印を縫っておく。

縦横ともに２本抜いたら次は３本織り糸を残す。また２本抜いて３本残す…ことを繰り返して必要なマスを作る。

この作業はナーベルソムの決まり事である。織り糸を抜く本数・残す本数を変えることは無い。

糸を抜く本数を間違えないようにするため布端１㎝ほどで２本抜き３本残す作業をして、正しいことを確認してから全部を抜くと良い。

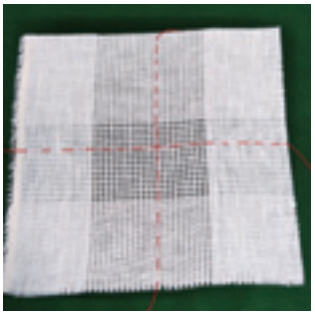

図13　中心に糸印

図14　布端を抜いて確認する

③　糸を抜いた布にアイロンをあてて、布目が真っ直ぐになるようにブロードでくるんだ板に画びょうでしっかりととめる。ナーベルソムはすべて裏からステッチするため、この見ている面が裏になる。

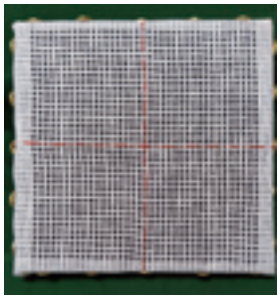

図15　布を板に画びょうでとめる

④　Stoppsöm（ストップソム）図10「あ」のところ麻糸16/２を２本取りで図案上のマス目の数にステッチする。輪に針を通してスタートする。右から左へ進める。あまりきつくならないようにマス目に糸を通して行く。糸を変える時や終わるときの糸の始末は目立たないようにステッチの間に通す。

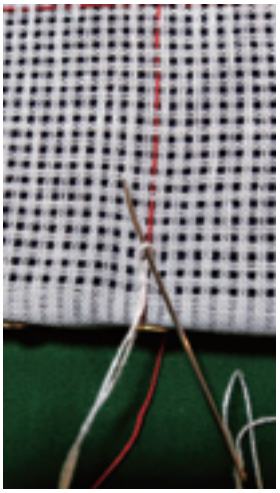

図16　２本どりの輪をひっかけて中心からスタート

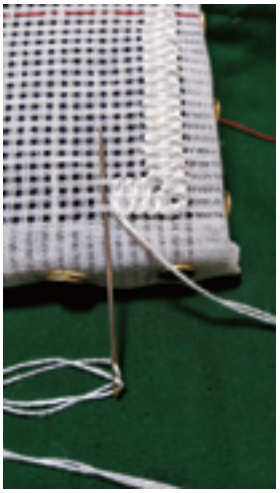

図17　角を曲がる

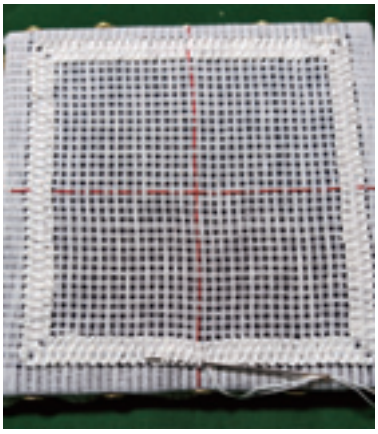

図18　ストップソムの終了

⑤　Bergsjöstygn（ビョルクスティン）図10「い」のところ　麻糸16/２を２本取りで左斜め上に進み頂点で左斜め下へ進む。板を１/２回転して刺し進め１周する。

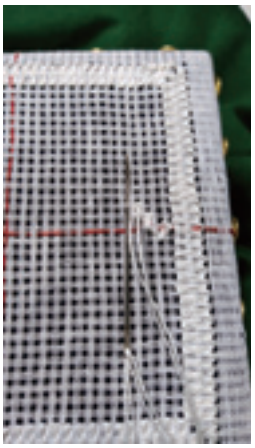

図19　左斜めに向かって進む

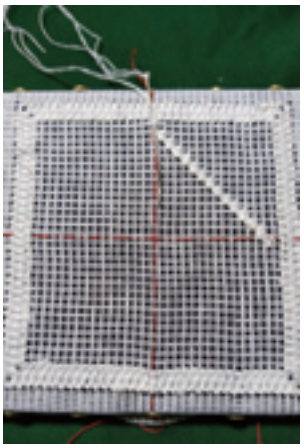

図20　頂点から左斜め下に向かって進む

図21　板を１/２回転させる

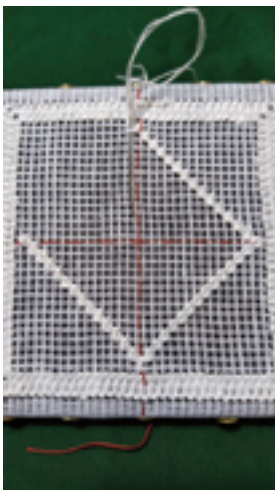

図22　１/２回転させたところから左斜め上に進む

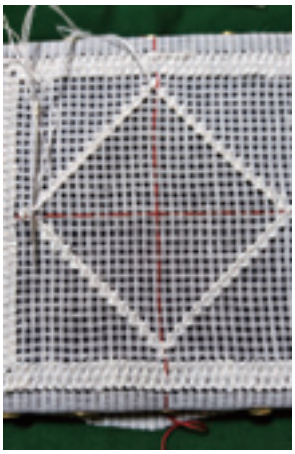

図23　ビョルクスティン終了

⑥　Bottensöm（ボッテンソム）図10「う」のところ　リトアニア製の麻糸（黄色）を使用した。１本取りでマス目が交わるところに斜めに針を入れる左斜め上に糸を引きながら進む。角で１/４回転して左斜め上に進む。

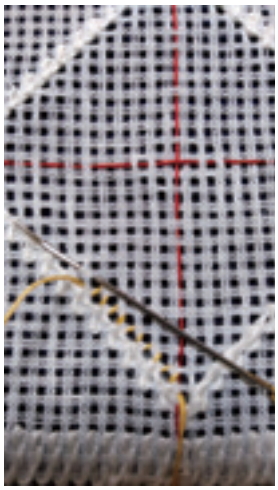

図24　中心から左上に向かって進む

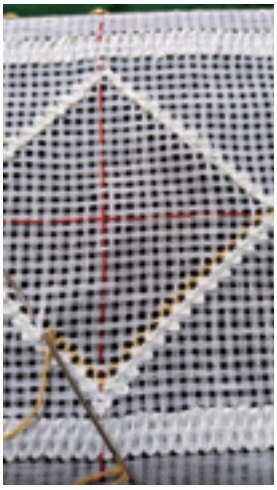

図25　角で１/４回転させて左上に進む

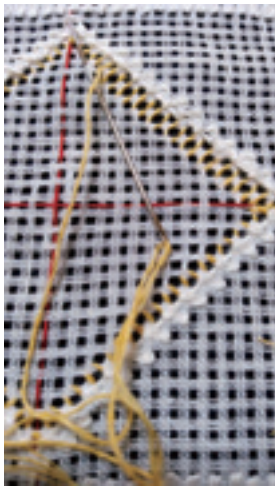

図26　２段目

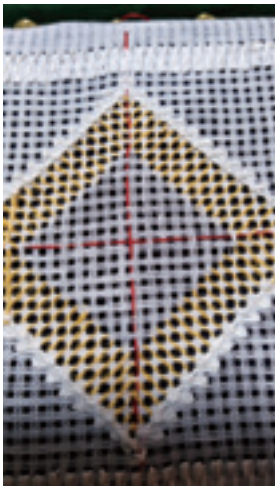

図27　ボッテンソム終了

⑦　Hasselastygn（ハッセラスティン）図10「え」のところ　麻糸16/２を１本取りで２列の間に３回糸を通し水平・垂直と交互に左斜め上に進む。角を曲がるときは４回糸を通し１/４回転して方向を変える。

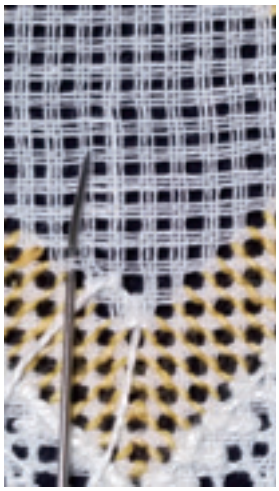

図28　中心からスタートし左斜め上に進む

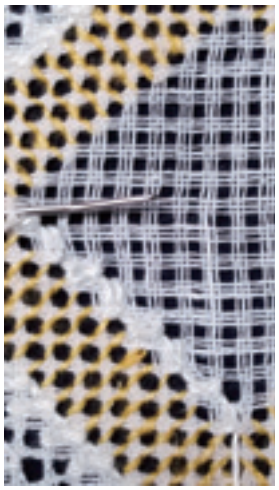

図29　角のところで１/４回転して

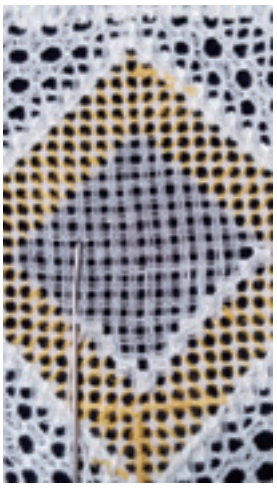

図30　左斜め上に進む

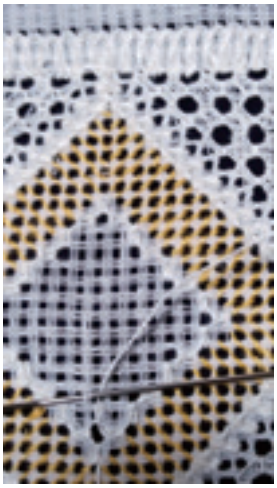

図31　２周目に入る

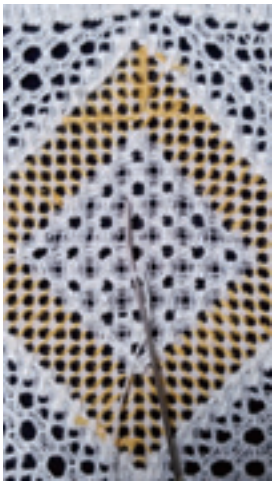

図32　ハッセラスティン終了

⑧　Gåsögon（ゴースアーゴン）図10「お」のところ麻糸35/３を１本取りで２列の間に２回糸を通す。水平・垂直を交互に繰り返し糸を引きながら右斜め上に進む。角で１/４回転をして方向を変える。往復する場合は１/２回転して常に右斜め上に進むようにする。

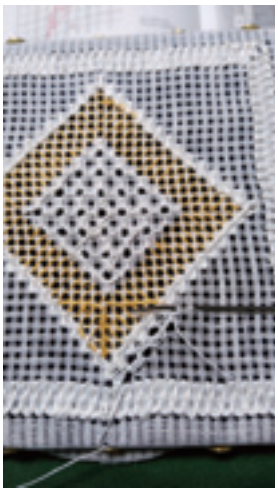

図33　中心から右斜め上に進む

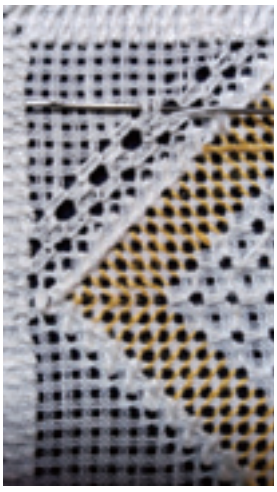

図34　往復させて刺し進める

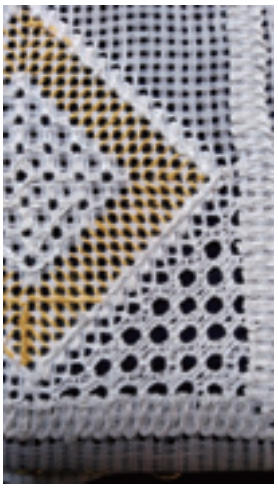

図35　ゴースアーゴン終了

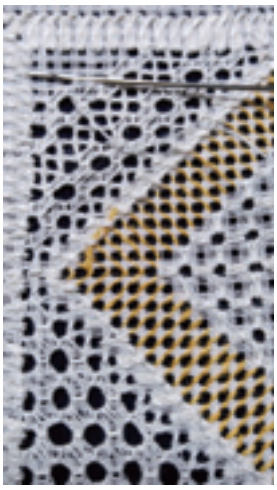

図36　ゴースアーゴンとボッテンソムを交互に刺す

図37　全て刺し終えた

⑨　仕上げ

ステッチが全て刺し終えたら画びょうを取り除いて布を板からはずす。ここで初めて布を表に返して出来上がりを見ることができる。

図38　板からはずす（裏面）

図39　表面

ストップソムの下に16/２を１本取りでバックステッチを一周刺す。

周囲を三つ折りにするので縫い代を揃えてカットする。裏から丁寧にアイロンをかける。四辺をできあがりに三つ折りにして90/２の細い糸でまつる。

図40　表からストップソムの下に16/２を１本取りでバックステッチを刺す

図41　縫い代を揃える

図42　三つ折りしてまつる

図43　完成作品

⑩　筆者が制作したその他のナーベルソム作品例

図44　筆者参考作品
Näversöms　mönster　P20
DALIOR

Ⅴ　考察

ナーベルソムは、ステッチをする針の進め方に一定の規則性がある。その針運びを守って進めて行かないとどのように刺して行けば良いのかがわからなくなる。頂上または角の所でステッチの方向が変わる時には、針運びの規則性がくずれないように注意して板を１/２あるいは１/４回転させる必要がある。これが極めて重要なテクニックである。板を回転させるので結果、様々な方向・角度からステッチをすることになる。ナーベルソムの図案は幾何学的で対称なものが多いのはどの方向からさしても間違えにくいという理由があるのではないか。ということが実際に制作してみて良くわかった。

使用するステッチは基本５つと少ないのだが、そのステッチの組み合わせ方、糸の太さによる濃淡の表し方、図案の構成によって様々な模様が考えられるのである。また、他の白糸刺しゅうの仲間にも織り糸を抜いてかがるものがある。ドロンワークやノルウェーのハーダンガー・デンマークのヒーダボー・ドイツのシュバルムなどである。これらはかがり方の技法も極めて似ていると言っても良い。このようによく似た技法が、各地に見られその土地に合わせて発達していったことが今回ナーベルソムの制作を通して改めて確認出来たのである。

ナーベルソムの本を見ると模様にアネモネやクローバーなど名前を付けてあるものがある。これは日本の伝統刺しゅう“こぎん”にも見られ、模様に「猫のまなぐ（猫の目）・てこな（蝶）・豆こ」など身近なものから名前を付けている。世界各地で昔から人々が身近な自然や植物等からヒントを得て図案を起こし刺しゅうを楽しみ、生活の中に取り入れていたのではないかと考えられるのである。

Ⅵ　おわりに

本研究では日本ではあまり知られていないナーベルソム刺しゅうの技法に重点を置き、初めてナーベルソムをする人にも理解しやすいように心がけて制作の過程を多くの図を用いて記した。スウェーデンにおいて出版されたナーベルソムの本はとても少なく、技法の解説も乏しい。そこでナーベルソムについてわかりやすく説明するにはどのように示したら良いか、図案はどのようなものが適切かを考え本稿にまとめることが出来たことは大変有意義なことであった。

これからもさらにナーベルソムについて研究を深めていきたいと思っている。そして、今後も世界各地で伝統的な刺しゅうが続いていくように願っている。

謝辞

本研究の作品制作において助言や貴重なナーベルソムの本や資料を拝見させて頂いた公益財団法人日本手芸普及協会師範の佐々木弘子氏・川端明子氏に深く感謝申し上げます。

参考文献

改訂手芸　著者代表添田静枝　p139建帛社　平成７年

文化服装講座７手芸編ｐ８文化出版局　昭和57年

Sy näversöm IRENE FROHLUND W&W 1979

näversöm　Edith Embro LTs förlag 1981

Näversöms mönster　Lisa Melen ICA−förlaget Västerås 1974

NÄVERSÖM　Lisa Melen BERVSKOLAN 1968

Mönsterbok 1 näversöm från Hälsingland　Tyra Fischer LTs FÖRLAG STOCKHOLM 1969

ナーベルソム　NPO 法人ヤマナシヘムスロイド復刊ドットコム　2015

HJ:s NÄVERSÖM SKOLA 資料紙　年不明

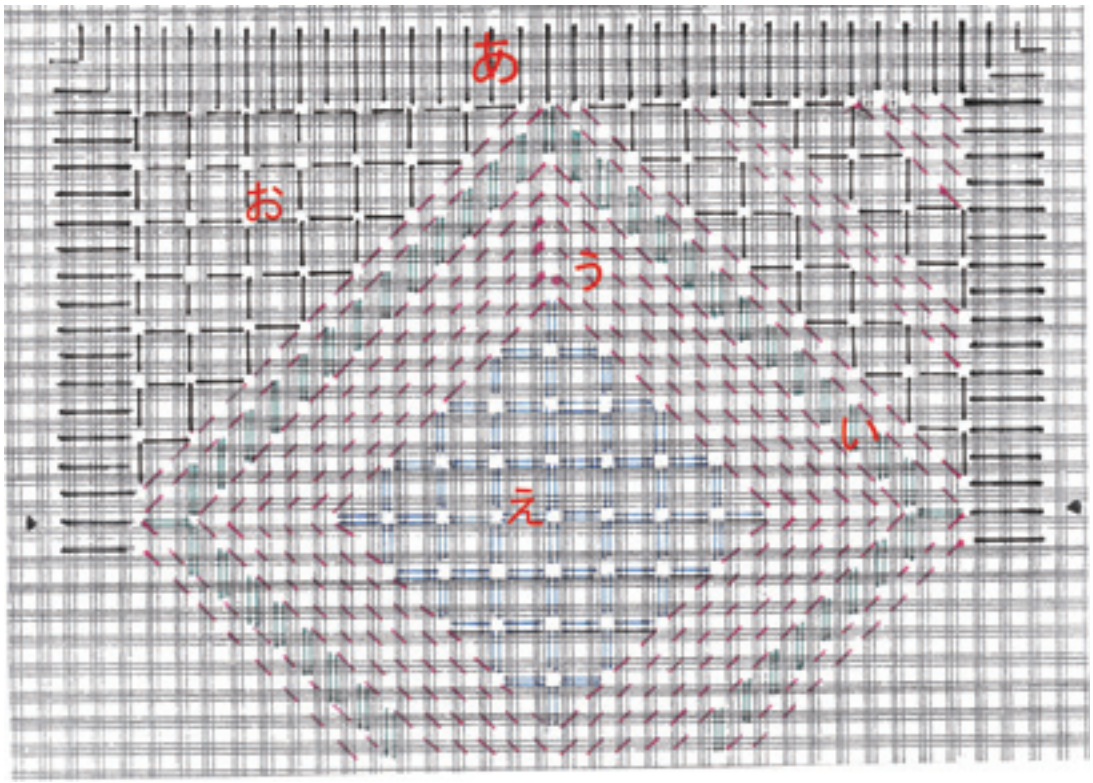

図10　オリジナル図案